テーマ４：まちづくりにおける新庁舎と複合施設の役割について

地域の活動を受けとめる複合施設「まちの枝」

複合施設の追加機能について

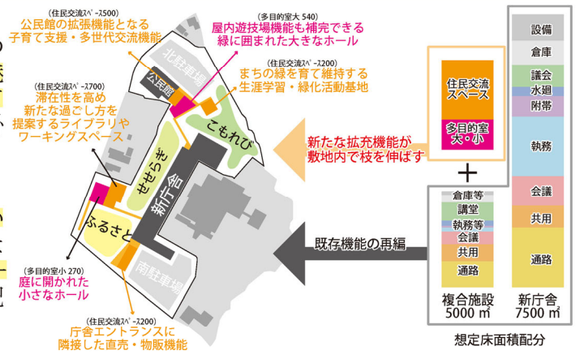
“住民交流スペース”と“多目的室”の枝を伸ばす

現在の庁舎・公民館機能に留まらない新たな機能を、ひとつのハコとして固めるのではなく、ここにしかない屋外空間の魅力を最大限享受する形で整備すべきと考えます。時間をかけて育っていく緑に対して、時期・棟・形も異なる無数の機能を掛け合わせ、まちの共有資源としての施設価値を高めます。

庭の性格にあわせた交流プログラムの配置

複合施設（現公民館機能＋追加機能）は、新庁舎から枝分かれするよう敷地内に分散して配置します。それぞれ性質の異なる「公民館」「交流館」「市庭館」「自然館」と名付け、キャノピーと歩行デッキでネットワークし、３つの庭を囲い込むように配置し、軒下スペースを挟んで屋内外の連続性を確保します。

隣接する庭との関係に応じた各スペースの活用方法を設定し、多世代が交わる様々な交流プログラムを創出します。



▲新たな機能がまちへ伸びる「まちの枝」

環境に配慮した庁舎（基本理念２）

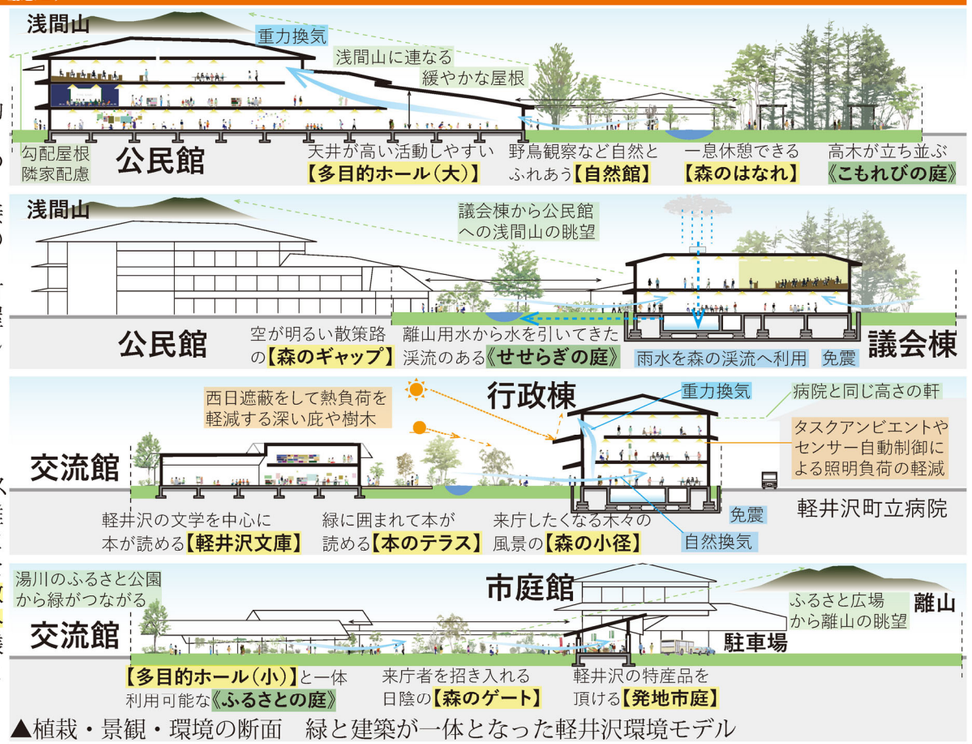
快適性・滞在性の高い環境づくり

軒下でつながりながら、枝葉のように活動スペースを広げる庁舎・複合施設が、３つの庭をに囲います。

それぞれの庭は隣接する庁舎・複合施設の機能と関連しながら、高い快適性によって町民の滞在・積極的な屋外空間の活用を促進します。

半屋外を使いこなす生活様式へ

新型コロナウィルスのように他人との距離が必要とさせる状況においても、雨や日射を防ぐことができる無数の木陰や軒下の半屋外空間が、新しい生活様式の試みに寄与すると考えます。



▲植栽・景観・環境の断面　緑と建築が一体となった軽井沢環境モデル

テーマ３：景観形成について

小さな屋根と緑があつまる風景「まちの葉っぱ」

中軽井沢地区の緑について

湯川と離れ山の緑をつなぐ

自然公園や観光施設をもつ湯川沿いの緑と、潤いのある静かな住宅エリアである離山の裾野を、整備地域の緑によって繋ぎます。

敷地内は地域風土にあわせた樹木・植栽を選定し、既存樹木を限りなく残しながら、建築と緑を一体的に整備していきます。

周辺への配慮

日常的な「町民のための自然」をめざす

多様な性格をもつ軽井沢のみどりに対し、中軽井沢の中心街に近接する整備敷地は、町民の日常的な憩いの場となる緑地を内包した庁舎・複合施設整備によって、多くの人々が日常的に訪れたくなる「まちの森」を育む場となります。

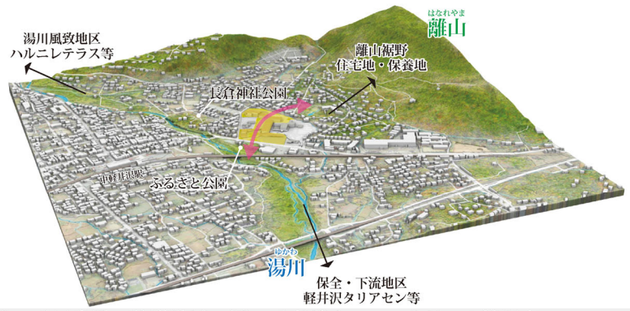
部位に応じた多様な緑オプション

敷地内の舗装材は、バリアフリー、凍結、雨水浸透を考慮し比較検討を行います。

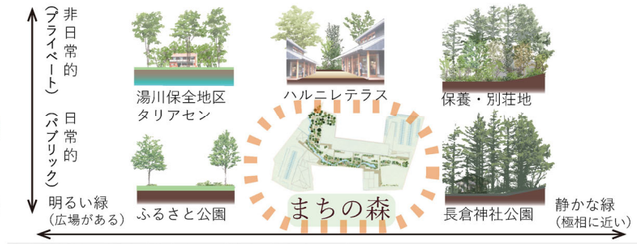
庇やパーゴラは色彩だけでなく耐久性にも考慮し、木調アルミ等も含めて省メンテナンスな建築緑化を考案します。

ビオトープは雨水をはじめ再利用水による水源や、維持管理の実現性やＰＲ性も考慮しながら、屋外空間の快適性と滞在性を向上させるツールのひとつとして積極的に検討します。

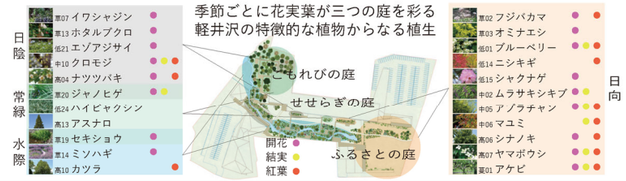
既存樹木は可能な限り保存し、移植を要する場合も１年以上の余裕をもった移植準備工が行えるよう、設計初期段階での診断、パースによる景観比較等により移植計画を立案します。



▲エリア鳥瞰　整備地域＝緑の回廊グリーンコリドーの結節点



▲軽井沢の緑を補完し、繋ぐ「まちの森」



▲庭ごとの樹種選定や性格付け

品位と調和を備えた緑の中の庁舎（基本理念４）

軽井沢の“まちなみ”を先導するフラッグシップ

ヒューマンスケールな建築・植栽が集まり形成される、まちのような空間で、軽井沢の景観形成の新たなモデルをつくります。建築の屋根や壁面のみでなく、屋外の工作物や家具についても、軽井沢景観ルールを展開しながら、親自然的な形や素材をデザインします。

省メンテナンスな素材選定を基本として、サスティナブルな景観を育むシティホール

キャノピーやパーゴラ部分など、フレームが露出する部分は木調アルミ材ルーバーなど、メンテナンスフリーかつ自由な色彩調整が可能な素材で、軽井沢景観ルールによる落ち着いた色調にあわせます。

屋根の２寸以上の勾配を下屋を含めた全ての部位で徹底します。様々な形式の屋根を、素材とみどりの共通言語によってなじませていきます。

乾式屋根面は中規模噴火の際などに噴石による損傷を防ぐため、鉄板敷き込みや剛強な野地板の採用等を検討します。

木質化した躯体フレーム・内装が、庭に表出して緑と混ざりあう軽井沢らしさのある景観を形成します。

▲前庭イメージ　「ふるさとの庭」から北を見る

▲裏庭イメージ「こもれびの庭」から南西を見る